



## 実行委員会 委員長 小宮山 宏

大変素晴らしい発表をたくさん見せていただきまして、誠にありがとうございます。

今年の特徴は、なんとといっても全国的に悪天候になってしまったことであり、その影響で出場出来なかった「みとよヤングエコサミット」は、本当に残念でした。しかし、その悪天候の中みなさんお越しいただき、会場も熱がこもって大変賑やかで、本当に素晴らしく思います。

実は今回、実行委員会及び企画審査委員会としては、国際展開も考えておりました。それというのも、中国から、低炭素杯の仕組みや取組の内容を参考にしたいという話がありました。

中国では「PM2.5」などの大気汚染問題が大変な状況になっていますが、本来CO2の排出を削減できれば、大気汚染の改善にも効果がある訳ですから、実は同じ方向を向いている問題なのだと思います。そういった意味でもぜひ、お手伝いしたいという気持ちがあったのですが、政治的な理由で急遽渡航できなくなってしまいました。来年こそ来てもらえるように、再度働きかけていきたいと思っています。

中国だけに限らずベトナムやインドネシアなども少しずつ環境問題が深刻になってきており、まさに1950～1960年代の日本中で私たちが経験した状況と同じなのです。今後は、二酸化炭素の問題にも取組む必要がありますが、これらの国々にとって今世紀中の重要な問題だと思います。



## 環境副大臣 北川 知克

低炭素杯2014表彰式の開催にあたりまして、環境省を代表して、御挨拶申し上げます。

さて、昨年9月に発表されたIPCC、気候変動に関する政府間パネルの報告書では、温室効果ガスの累積排出量は、早急に現在の排出量を減らさなければならないレベルに達しています。また、昨年の猛暑や集中豪雨、竜巻などの異常気象については、地球温暖化との関連が疑われています。本年3月には、ここ日本で、温暖化による影響やその対策についての報告書が発表されます。

地球温暖化問題への対応は、世界全体で考えなければならない課題であると同時に、我が国でも、国民の皆さん一人ひとりの力をお借りしなければ、解決できないものです。

我が国においても、東日本大震災という未曾有の大災害を経て、一人ひとりの意識は確かに変わりつつあります。そうした中、本日ご参加の皆様方が、全国各地で、温暖化防止活動に尽力されておられることを、大変心強く思うと同時に、本イベントがますます有意義なものになっていると感じております。

「低炭素杯」は、モデルとなる活動のプレゼンを通じて、様々な方々との交流を深め、学び合い、連携を広げていくものです。今回、全国各地の1,620団体から選ばれた41の団体が参加され、それぞれの地域に根ざした、アイデアにあふれた取組が発表さ

今日の天気でも、温暖化とは関係のない異常なのか、温暖化によってもたらされている影響なのか分かりません。しかし、全体としてみると温暖な地域がより暖かくなり、台風の巨大化や、大雨の降る回数や時期の狂いなど、温暖化の影響として予測した通りに起きているわけで、あまり疑う理由はないのだと思います。

そういった意味でも、私たちは自信を持って前に進み続けなければなりません。

今年の特徴が「悪天候」だ、という話をしましたが、本来の特徴はというと、一番は多様性が増したことです。

私たちが生きていく上で、食べること、動くこと、あらゆることで人間はエネルギーを使います。人間が生活する全ての基にはエネルギーが密接に関係しているのです。つまり、逆に言うと、「ゴーヤ」から「エコドライブ」まで色々な取組のアプローチが出てくるというのはごく自然なこととも言えます。

それから、参加主体も多様化しました。今までは学校や自治体等の参加が多く見られましたが、今年は大企業からベンチャー企業、大学発ベンチャーや、旅館の組合など、様々な主体がオリジナリティを持った取組を発表してくれたのです。おかげで、今年のエントリー前の時点ではどの分野から応募があるか予想して部門を割り当てていましたが、来年は、改めてまた部門を考えなくてはならなくなりました。

エネルギーというものはみんなが使うものであり、これをどうやって快適な暮らしを維持しつつ減らしていくことができるのか。これが今後求められる「知恵」であり、この「知恵」を日本で生み出し、「知恵」をもってみんなで世界に発信していきましょう。

れたと伺っています。

私は、地球温暖化対策を含んだ、あらゆる環境問題を解決するキーワードは、相手との「認め合い」、「思いやり」、「分かち合い」、この3つであると考えています。相手は人だけに限りません。大自然の摂理の中で存在する資源や、生きとし生けるもの全て、また、あらゆる可能性を秘めた未来という時にも思いを致しながら、今回のイベントが、「認め合い」、「思いやり」、そして「分かち合う」ことに繋がるものとなれば、これに勝る喜びはありません。

なお、今回、環境大臣賞を受賞された方に授与されるトロフィーは、栃木県の一部地域でしか収穫できない地域資源の「麻」を活用して制作されるなど、制作に関係された方々の気持ちがこもっています。まさに、先ほどのシンポジウムの中でお話のあった、「里山資本主義」の理念が息づいています。この後、制作過程についての御報告があるとのことで、非常に楽しみにしております。

最後になりましたが、全国各地での低炭素社会づくりに関する地域活動を報告し・学びあい・連携の輪を広げる「場」をお作りいただいた、小宮山実行委員長はじめ委員の皆様方、共催企業・団体、全国及び地域の地球温暖化防止活動推進センターの皆様方に対し、厚く御礼申し上げますとともに、本日御参加の皆様方の今後ますますの御健勝と一層の御活躍をお祈りいたしまして、私の挨拶とさせていただきます。

ご清聴、誠にありがとうございました。

(代読 環境省地球環境局地球温暖化対策課長 和田 篤也)